

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531198

研究課題名(和文)工業高校生の自己概念形成とその役割

研究課題名(英文)Role of the students' self-concept in Japanese technical high schools

研究代表者

島田 和典(Shimada, Kazunori)

大分大学・教育福祉科学部・准教授

研究者番号：50465861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、工業高校生の自己概念形成について、その形成過程及び有用性を明らかにすることを目的とした。研究代表者らは先行研究において、工業高校生の自己概念の構造を明らかにしている。本研究では、工業高校の入学段階における意識群を自由記述から抽出(11意識カテゴリ)し、縦断的調査を経て、これらがその後の自己概念形成に重要な役割を果たすことを明らかにした。具体的には、入学段階において学校生活に対する意欲を専門性と関連づけて高めること、入学時において既に卒業後の進路についてある程度の意識を高めておくこと等の重要性が示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to explore the students' self-concept in technical high school. A survey was conducted on tenth-grade technical high school students. We carried out the text-mining analysis based on the students' responses. The result of this, we could classify "11 consciousness categories". Also we found that students' consciousness categories influence self-concept by using a quantification method. On the other hand, as a longitudinal design study, a survey of career consciousness & self-concept was conducted on twelfth-grade students. From the results, we found that self-concept plays an important role in promoting career consciousness in twelfth grade. In addition we suggested that career counseling plays an important role to promote the self-concept.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：工業教育 工業高校 生徒 自己概念 キャリア意識

### 1. 研究開始当初の背景

近年、若者の「科学技術離れ」「理科離れ」に加え、定職につかない若者(いわゆるニート)の増加が叫ばれている。一方、団塊の世代が大量に退職を迎える昨今、我が国の技術・技能の重要性が改めて表面化し、その継承が危惧されている。今後、次世代を担う若者が、科学技術に夢と希望を傾け、科学技術に対する志向を高めていくことはますます重要である。このような視点から、「若き技術者の育成」に着目すると、工業高校の果たす役割は大きい。一般的に工業高校の教育課程では、工業の各分野に関する知識や技能、創造性や実践的な態度を習得することが期待されており、社会から見た工業高校生像は、若き技術者の姿である。しかしながら、工業高校生は、様々な理由から工業高校を選択しており、すべての生徒が、必ずしも期待されている姿を目指し進路選択をしてきているとは限らない。このため、工業という専門性の延長として見える将来の自己像と、日々の学校生活の中にある現実の自己像との狭間で、揺らいでいる姿が伺える。このような姿から、工業高校で学ぶ生徒の自分自身に対する意識は個々様々であることが予想される。しかし、この意識に対する研究は十分に行われていないのが現状である。研究代表者らは、この構造や発達課題を検討することが、上述の問題解決にむけた一つのアプローチになると考えた。このような生徒の自分自身に対する捉え方は、自己概念(Self-concept)と呼ばれている。自己概念は、「自分自身をどのように受けとめ、どのように思っているのか、ということについての概念的ゲシュタルト」を意味している(Rogers, C.R., Dymond, K.F., 1954)。これは、個人のあらゆる経験の場を源泉として形成されるものであり、個人の行動を決定する重要な要因である。例えば進路指導において仙崎ら(2001)は「自己概念を明確化する」ことの重要性を指摘している。研究代表者らはこれまで、工業高校に学ぶ生徒が形成する自己概念の構造を明らかにし、工業高校生の自己概念は、自律性や専門性、社会性等の志向性によって構造化されていることを明らかにしている。

### 2. 研究の目的

そこで本研究は、工業高校生の意識形成について、生徒の自己概念(Self-concept)に着目し、その形成過程・変容及び形成された自己概念の有用性を明らかにすることを目的とした。これまでの研究成果を踏まえ、特に工業高校入学・卒業(入口と出口)段階の意識に着目する。

### 3. 研究の方法

本研究では具体的に以下の5点について研究を遂行した。

(1)工業高校生の入学段階において形成する意識群を抽出する。工業高校新1年生(大分

県、大阪府、滋賀県、鳥取県の工業高校)を対象に、入学段階に自由記述による調査を実施。テキストマイニング手法を用いて出現頻度の高い記述をカテゴリ化する。

(2)入学段階において形成される意識群が、その後の自己概念形成に果たす役割を検討する。(1)において実施した同一生徒群を対象に、1年生の学年末の段階で形成される自己概念との関連性を数量化法を用いて縦断的に検討する。

(3)生徒の工業高校生活3年間を俯瞰的に把握し、エスノグラフィー手法を用いて自己概念の変容・形成過程を検討する。3年間の長期的な縦断的調査((1)とは異なる生徒群)を実施。対象校のカリキュラムや行事、進路指導の状況、生徒・教員へのインタビューを通して、自己概念形成の変容やそのイベントを検討する。

(4)形成された工業高校生の自己概念が、将来を見据えた意識に果たす役割を検討する。具体的にはキャリア意識に着目し、工業高校3年生(大阪府)を対象とした2回の縦断的な調査を実施。様々な進路に対するライフイベントの整理や影響の検討と共に、重回帰分析によって自己概念がキャリア意識に与える影響を検討する。

(5)海外の工業教育の現状の把握。上記の我が国国内の調査に加え、アメリカにおける工業教育の現状を視察によって把握する。アメリカの職業系ハイスクールへの現地視察、教員・生徒へのインタビューを実施する。

### 4. 研究成果

上記5点の方法に基づいて、以下の通り研究を遂行した。

(1)工業高校生の入学段階の意識群の分析

調査は、大分県、大阪府、滋賀県、鳥取県の平成24年度に入学した工業高校新1年生計832名(有効回答777名、有効回答率93.4%)を対象に実施した。調査票は、高校名、所属学科、学籍番号等を記入した上で、「工業高校への進学理由」や「工業高校における意欲」、「自分自身・工業高校について思うこと」等を問う設問に自由記述で回答するよう設定した。得られた自由記述に対し、設問ごとに、テキストマイニング用ソフトウェア(IBM:TAFS, Ver.4)を用いてキーワードを抽出し、意識カテゴリを作成した。得られたカテゴリから工業高校入学段階における生徒の意識構造を把握することを試みた。

意識カテゴリの作成：各質問項目に対する生徒の記述(キーワード)から意識カテゴリを作成した。その結果「進学理由」では、表1の通り「卒業後、技術者になりたかったから」等の記述から「卒業後進路への期待(60.0%)」カテゴリが、「工業に興味があったから」等の記述から「専門教科に対する関心・意欲(42.0%)」カテゴリ等が作成され

表1 入学段階の11意識カテゴリ

11意識カテゴリ	該当者数	頻度
卒業後進路への期待	466	60.0%
専門性習得への期待(知識・技術等の習得)	451	58.0%
専門教科に対する関心・意欲	326	42.0%
資格取得への意欲	319	41.1%
学校生活への意欲	219	28.2%
ものづくり(製作活動)への意欲	174	22.4%
部活動への意欲	164	21.1%
ネガティブな自己像	99	12.7%
高校入学段階の思い(楽しさ・充実感・安堵感)	92	11.8%
工業高校の特色(人間関係,規則の厳しさ等)	66	8.5%
ポジティブな自己像	36	4.6%

N=777

た。同様に「意欲」では、「専門性習得への期待(58.0%)」、「資格取得への期待(41.1%)」、「部活動への期待(21.1%)」等のカテゴリが作成された。

意識カテゴリと自己概念との関連性：意識カテゴリと自己概念5因子との関連性を検討した。その結果、「卒業後進路への期待」カテゴリがF2 キャリア志向性に、「専門性習得への期待」カテゴリがF3 専門的能力志向性に関連する内容である等、意識カテゴリと自己概念構成因子群との関連性が認められた。

これらのことから、工業高校入学段階において形成される意識群は、その後の工業高校生の自己概念形成に向けた基礎的な構造を成している可能性が示唆された。

## (2)自己概念と入学段階の意識群との関連

調査は、(1)の同一生徒群を対象(大分県、大阪府、鳥取県)とし、平成24年4月の1回目の調査に続き、平成25年2～3月に2回目の調査を実施した(有効回答690名、有効回答率93.6%)。調査票は、高校名、所属学科、学籍番号等を記入した上で、研究代表者が先行研究において作成した「工業高校における生徒の自己概念尺度」を5件法(とてもあてはまる、少しあてはまる、あまりあてはまらない、全くあてはまらない)で回答するように設定した。手続きとして、まず11意識カテゴリの該当数によって上位群・下位群を振り分け、これら両群の自己概念形成の状況を比較した。次に、自己概念構成因子群と11意識カテゴリの関連性を数量化・類によって検討した。

意識カテゴリ上・下位群による自己概念形成の差異：11意識カテゴリのうち、平均のカテゴリ該当数(3.11)を考慮し、3カテゴリ以上の該当者を上位群(n=234)、2カテゴリ以下の該当者を下位群(n=456)とした。分散分析の結果、F1 自律志向性因子、F3 専門的能力志向性因子、F4 社会的価値志向性因子の3因子において、上位群が下位群より有意に高い得点であることが認められた(p<0.01)。

自己概念に対する意識カテゴリの影響：そ

表2 自己概念に対する11意識カテゴリの影響

自己概念構成因子群	重相関係数	F値	df(1,688)
F1 自律志向性因子	0.21	2.88	**
F2 キャリア志向性因子	0.18	2.08	*
F3 専門的能力志向性因子	0.16	1.59	†
F4 社会的価値志向性因子	0.22	3.22	**
F5 自己モニタ志向性因子	0.12	0.82	

N=686 †p.<0.10, \*p.<0.05, \*\*p.<0.01

こで自己概念5因子を基準変数、11意識カテゴリを説明変数とする数量化・類を行った(意識カテゴリの該当が0の者を除く)。その結果、表2に示す通り、F1 自律志向性因子、F2 キャリア志向性因子、F3 専門的能力志向性因子、F4 社会的価値志向性因子の4因子において重相関係数が有意であった。これら4因子への具体的な意識カテゴリの影響力を検討した結果、「卒業後進路への期待」や「学校生活への意欲」等に有意な影響力が認められた。

これらのことから、入学段階において学校生活に対する意欲を専門性と関連づけて高めるのと同時に、入学時において既に卒業後の進路についてある程度の意識を高めておくことが、自己概念形成に重要であると示唆された。これらの知見は、工業高校を希望する中学校3年生において、その進路指導の場面で重要な知見であると考えられる。

## (3)高校生活3年間の自己概念の変容

工業高校における生徒の自己概念の変容・形成過程を、エスノグラフィー(授業参与記録、教師へのインタビュー等)を通して縦断的に検討した。公立S工業高校生181名の3年間の自己概念の形成状況を、研究代表者らの作成した「工業高校生の自己概念尺度」を用いて把握し、ライフイベントとの関連性を視野に、エスノグラフィーを基に具体的な事例を検討した。S工業高校は、1925年に職工学校として開学した公立高校である。開学時は、紡織(現テキスタイル)系学科と機械系学科の2学科であったが、1983年に電気系学科が追加設置され、現在の3学科となっている。全校生徒が約700名の中規模校に位置付けられる。本研究は、S工業高校の2005年度入学生を対象に、入学から卒業までの3年間において、教育現場に参入したエスノグラフィーを実施した。

自己概念の累積的な因果関係：低学年の自己概念形成が、学年の進行に伴って変容する自己概念形成に果たす役割を、重回帰分析を用いて検討した。まず、2年生の自己概念構成因子群を基準変数、1年生の自己概念構成因子群を説明変数とした2年生への影響力の検討を、次に、3年生の自己概念構成因子群を基準変数、2年生の自己

概念構成因子群を説明変数とした3年生への影響力の検討をそれぞれ行った。その結果、いずれの因子に対しても、有意な重相関係数(2年生への影響力:  $R=0.39 \sim 0.59$ , 3年生への影響力:  $R=0.52 \sim 0.63$ )が得られた。なお、分散拡大要因は低く(2年生への影響力:  $VIF=1.22 \sim 2.07$ , 3年生への影響力:  $VIF=1.04 \sim 1.96$ )、多重共線性は見られなかった。そこで、標準偏回帰係数に着目し、有意で絶対値が0.20以上をパス係数とするパス・ダイアグラムを作成した(図1)。

図より、次の3つの特徴を指摘することができる。第一に、1年生から2年生、3年生へと、同一の因子内で比較的強いパスが形成されていることである。このことは、学年の上昇に伴って同一因子内でその形成に有意な影響を与えることを意味している。例えば、1年生の自律性の高まりは、2年生の自律性の高まりへ、2年生の自律性の高まりは3年生の自律性の高まりにつながる可能性を示している。このことから、少なくとも本事例においては、低学年において形成された自己概念が、同一因子内の継時的な影響力によって、各因子別に累積的に形成されていく傾向があると示唆された。第二に、1年生のF1自律志向性因子が2年生のF3専門的能力志向性因子に、また、1年生のF3専門的能力志向性因子が2年生のF4社会的価値志向性因子にそれぞれ影響している等、同一因子内の継時的な影響力だけでなく、因子をまたぐ形で時系列的な影響力が存在している点である。これらは、1年生の自律性を高めることが、2年生での専門性につながる可能性を意味し、1年生の専門性を高めることが、2年生での社会的価値観につながる可能性を意味している。第三に、2年生のF3専門的能力志向性因子が3年生のF2キャリア志向性因子に負の影響を示し、自己概念構成因子群間の累積的な影響力が必ずしも肯定的な方向性でのみ因果していないことである。これは、2年生における専門性の育成を起点とする場合において、3年生の専門性とキャリア意識の

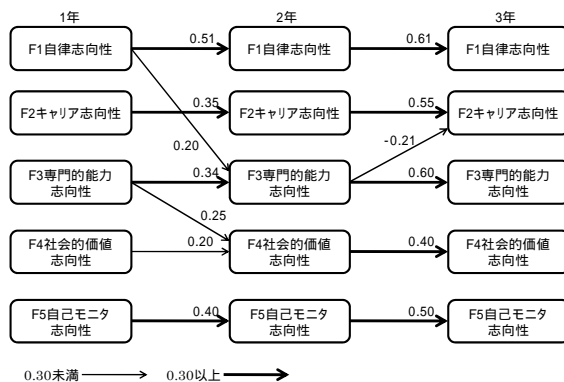


図1 低学年の自己概念が高学年の自己概念形成

形成が同時に成立しにくいことを示している。

3年間の自己概念変容のタイプ:そこで、3年間の自己概念の変容を分類した結果、自己概念尺度の全体得点の平均値を基準に、生徒を各学年別に上位(H)・下位(L)群に振り分けた。その後、各生徒の3年間のH-Lの推移に基づき自己概念の変容タイプを、(a)3年間を通して自己概念が適切に形成された状態を維持した生徒群(H-H群 40名)、(b)適切に形成されていない状態が続いた生徒群(L-L群 33名)、(c)低学年時には適切に形成されていたものが高学年時にその水準が減衰した生徒群(H-L群 21名)、(d)低学年時には適切に形成されていなかったものが高学年時にその水準が向上した生徒群(L-H群 22名)等に振り分けた。その上で、授業等参与記録、学級日誌、担任教員へのインタビュー等を基に、それぞれ具体的な生徒の事例を検討した。具体的に、H-H群、L-L群の生徒の事例を検討する。まず、H-H群の生徒AとL-L群の生徒Bの事例について、両者の学校生活の状況には、入学動機、教科学習、学校適応状況、進路選択等において前者に積極性、主体性が見られたのに対し、後者は消極的、受動的である状況が把握された。これらの事例から、自己概念を良好な状態を維持するためには、入学動機、教科学習、学校適応状況、進路等の要因が重要であることが示唆された。

次に、在学中に自己概念の変容が生じたL群、L-H群の生徒事例について検討した。その結果、H-L群の生徒Cは、積極的な動機で入学してきたものの、2年生時に生じた父親との関係の変化を契機に、成績の低下、学校適応状況の悪化が生じ、結果として専門分野とは関係のない進路を選択し卒業した。一方、L-H群の生徒Dは、明確な目的意識を持たず入学してきたものの、2年生時のインターンシップでの成功経験を契機に、授業に対する積極性が見られるようになり、クラス役員に立候補する等、学校適応状況が好転し、結果として専門分野と関連する業種への就職を果たし卒業した。

以上の結果から、工業高校生の自己概念形成を中核に教科指導、生徒指導、進路指導を展開するためには、それぞれのライフイベントを見極めつつ、将来と現在の自己像を適切に結びつけられるような教育支援が必要であることが示唆された。

#### (4) 自己概念とキャリア意識の縦断的検討

調査の対象は、大阪府の工業高校生3年生251名とした。キャリア意識を把握するための調査票に、河崎(2005)の作成した「キャリア意識尺度」(F1 将来展望・設計、F2 意思決定への自信、F3 情報・経験積極性、F4 肯定的な自己理解、F5 他者との関係重

視の5因子)を用意した。本尺度は、キャリアに関する能力の質問項目に対し因子分析を実施し、次の5因子を抽出している。調査は、平成21年4月(進級段階)及び、平成22年2月(卒業段階)の2回実施した。調査後、2回の調査から得られたキャリア意識構成因子群及び自己概念構成因子群の各尺度得点の差分(以下、「変容度」とする)を求め、キャリア意識構成因子群の変容度を基準変数、自己概念構成因子群の変容度を説明変数とする重回帰分析を実施し、3年生で展開された進路指導を視野に入れ、自己概念がキャリア意識に及ぼす影響力の検討を行なった。

キャリア意識構成因子群の変容：調査の結果、有効回答202名、有効回答率80.5%となった。調査対象者のキャリア意識構成因子群の変容状況について、対応のある一元配置分散分析の結果、F1 将来展望・設計因子( $F(1,201) = 10.50, p < 0.01$ )、F2 意思決定への自信因子( $F(1,201) = 24.96, p < 0.01$ )、F4 肯定的な自己理解因子( $F(1,201) = 3.90, p < 0.01$ )、F5 他者との関係重視因子( $F(1,201) = 11.15, p < 0.01$ )の4因子において、3年生の進級段階と卒業段階との間で有意な変容が認められ、いずれの因子も有意に向上したことが確認された。

3年生において形成された自己概念がキャリア意識に及ぼす影響：そこで、3年生において形成された自己概念がキャリア意識の形成に及ぼす影響を検討するため、3年生進級段階と卒業段階における自己概念構成因子群及びキャリア意識構成因子群の変容度(各尺度得点の差分)を求め、キャリア意識構成因子群の変容度を基準変数、自己概念構成因子群の変容度を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、すべての因子で有意な重相関係数が得られ( $R=0.45 \sim 0.71$ )、全体として、自己概念構成因子群の変容がキャリア意識構成因子群に有意な影響力を与えていることが確認された(表3)。表から、特に自己概念の「自律志向性因子」の影響力が広範に認められ、3年生進級段階における前報の影響力と同様の傾向が示された。また、自己概念のF2 キャリア志向性因子からキャリア意識のF1 将来展望・設計因子へ、F4 社会的価値志向性因子からF1 将来展望・設計因子、F3 情報収集・経験への積極性因子、

F5 他者との関係重視因子へ、F5 自己モティベーション志向性因子からF2 意思決定への自信因子、F4 肯定的な自己理解因子への影響力がそれぞれ認められた。一方、自己概念のF3 専門的能力志向性因子からキャリア意識のF1 将来展望・設計因子においては負の影響力が認められた。これらのことから、特に、3年生でのF3 専門的能力志向性因子の影響力の変容から、「専門性」が眼前の進路実現に偏って寄与し、生涯キャリアに適切に位置づけられていない可能性が示された。生徒の「専門性の捉え」に留意し、慎重な教育的支援の必要性が示された。

#### (5)2012年3月19日 Salne High School

視察は、平成24年3月19日に米国ミシガン州にあるSalne High Schoolで実施された。当該高校は幅広い専門性を学ぶことが可能な公立の職業高校であり、生徒数は約1800名である。Easton Michigan Universityの研究協力教員の協力を得て、当該高校への視察を依頼した。

広大な敷地に立つSalne High Schoolでは、放送メディア系、福祉介護系、自動車系、機械系、テキスタイル系等の幅広いコースが開設されており、生徒は自らの希望に応じて各コースの科目を履修するシステムとなっていた。比較的自由な校風の中、生徒へのインタビューの際には、生徒は、熱心に仕様機材の説明、授業内容の説明を行い、授業の目的を十分に生徒が理解している場面が見受けられた。また、学年の括りの無い履修体系や例えば自動車等の実習機材が地元企業の寄付によるものである等の点については、我が国との違いが認められた。一方、使用する工作機械、安全に対する配慮については、多くの点で我が国と共通している点が見られた。本視察からは生徒、教員の質的な状況を確認することができた。今後は、当該校をはじめとする生徒に対し、上述(研究結果(1)~(4))のような調査を実施し、質・量の両面から我が国と米国の生徒の自己概念等の差異を検討する必要性が認められた。

以上、本研究では、工業高校生の意識形成について、工業高校生の自己概念に着目し、その形成過程及び形成された自己概念の有用性を検討した。特に工業高校入学段階における意識群を分析し、11意識カテゴリを抽出することができた。これら意識カテゴリは、入学後の自己概念形成に一定の役割を与えることが明らかにできたことは、工業高校を目指す中学生への進路指導に重要な知見として位置づけられる。一方、3年間を通じた工業高校生の自己概念の変容や卒業後のキャリア意識に着目した分析から、生徒は様々な高校生活でのイベントによって変容・成長し、そこで形成された自己概念が、将来に向かう自己のキャリアに有用な影響を与えることが確認できた。

表3 キャリア意識に対する自己概念の影響

キャリア意識 (基準変数)	重相関係数	F値 df(5,196)
F1 将来展望・設計	0.71 **	42.53
F2 意思決定への自信	0.59 **	22.15
F3 情報・経験積極性	0.57 **	20.52
F4 肯定的な自己理解	0.45 **	11.35
F5 他者との関係重視	0.52 **	16.19

N=202                      \*\*p<0.01 \*p<0.05

今後は、社会で技術者として活躍する工業高校の卒業生の追跡調査を視野に、工業高校で形成される自己概念形成の卒業の有用性を明らかにする必要がある。これらを今後の課題とする。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

島田和典, 工業高校生の学習目標志向と入学段階における意識群との関連性, 工業技術教育研究(日本工業技術教育学会), 査読有, 第19巻, pp.19-25, 2014

Kazunori Shimada, Yasushi Ichihara, Yoichi Miyagawa, Jun Moriyama, Structure of Students' Consciousness at the Time of Entrance Technical High Schools in Japan, *Journal of Asian Academic Society for Vocational Education and Training*, 査読有, Vol.5 No.1, pp.70-80, 2012

島田和典, 森山潤, 工業高校生の自己概念の変容・形成過程の縦断的事例検討-入学から卒業までのエスノグラフィーを通して-大分大学教育福祉科学部研究紀要, 査読無, 第34巻 第2号, pp.207-222, 2012

Shimada Kazunori, Yasushi Ichihara, Relationship between Formation Process of Students' Self-concept and Career Guidance in a Technical High School in Japan, *ICTE2011-Japan Research Papers (The International Conference on Technology Education in the Pacific-Rim Countries)*, 査読有, pp.99-106, 2012

Shimada Kazunori, Jun Moriyama, Shimada Hideaki, Role of the Students' Self-Concept for Their Career Consciousness in Japanese Technical High School: Case Study of a Longitudinal Design in 12th Grade Students, *Journal of Asian Academic Society for Vocational Education and Training*, 査読有, Vol.4 No.1, pp.13-22, 2012

〔学会発表〕(計7件)

島田和典, 工業高校生の入学段階の意識と自己概念形成との関連性-1年生を対象とした縦断的調査を通して-, 日本産業技術教育学会第56回全国大会(講演論文集 p.49), 平成25年8月24日, 山口大学

島田和典, 工業高校生の入学段階における意識群と学習目標志向性との関連性, 日本工業技術教育学会第23回全国研究大会(大会資料 pp.31-32), 平成25年7月14日, 大阪電気通信大学

島田和典, 工業高校における生徒の入学段階の意識構造, 日本産業技術教育学会第55回全国大会(講演論文集 p.84), 平成24年9

月1日, 北海道教育大学旭川校

Kazunori Shimada, A Study of the Students' Self-Concept in Technical High Schools in Japan, Council on Technology Teacher Education(ITEEA 74th Annual Conference Program p.41), 平成24年3月17日, Long beach, USA

島田和典, 工業高校3年生におけるキャリア意識の変容-工業高校生の自己概念及び進路指導に焦点を当てて-, 日本産業技術教育学会技術教育分科会第17回研究会(大会配布資料全11p.), 平成23年12月18日, 埼玉大学

Kazunori Shimada, Formation of Students' Self-concept in a Technical High School in Japan, The International Conference on Technology Education in the Pacific-Rim Countries(Conference Program p.94), 平成23年11月4日, 名古屋外語専門学校  
島田和典, 工業高校生の自己概念の変容・形成過程の縦断的事例検討, 日本産業技術教育学会第54回全国大会(講演論文集 p.13), 平成23年8月27日, 宇都宮大学

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

島田 和典 (SHIMADA Kazunori)  
大分大学・教育福祉科学部・准教授  
研究者番号: 50465861

(2)研究分担者

森山 潤 (MORIYAMA Jun)  
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授  
研究者番号: 40303482

宮川 洋一 (MIYAGAWA Yoichi)  
岩手大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 70552610

市原 靖士 (ICHIHARA Yasushi)  
大分大学・教育福祉学部・准教授  
研究者番号: 20572837